

## 父母のおしえを聞く



母が亡くなつてから約八〇年にもなる。だ  
のに私は時折その母と出合うことがある。

それは例えばご門徒の家の報恩講(勝林寺  
のご門徒の家では十一月から翌年の春にかけ  
て親鸞聖人のご命日法要「報恩講」を各戸で  
お勤めする)にお詣りして全員で「正信偈」  
(親鸞のつくった念佛のおしえを讀えるうた)  
を唱え、「ご文章」(蓮如上人の手紙文)を  
読む時である。ご文章の本には歴代住職の手  
垢が残っている。母もその中の一人。母の苦  
労の手形に今も出合う。それと「正信偈」に  
ついては母との強い思い出が彷彿と思い浮か  
ぶ。

父亡き後、母は懸命に寺を支え、子育てに  
励んだ。その期間は2年ばかりかと思うが、  
獅子奮迅の毎日であった。

小柄の人気がいつも和服法衣をまとっていた。  
わたしは毎朝五時に起床させられた。他のきよ  
うだい(姉と妹と弟)はまだ寝ているのに、  
わたし一人、本堂で『おつとめ』の稽古。

当時、新節といつて、今の「正信偈行譜」  
が制定されたころであつたのだろう、はじめ  
のころは蓄音機にあわせて、馴れてからは一  
人で独唱させられた。

朝5時の本堂は暗いし冬は凍てつくような  
寒さ。しかも6~7歳の子供。震えたり眠り  
こけたり。そんな私を母はこのように叱り励  
ました。

「ご開山さまのおしえのお言葉です。大きな  
声ではっきり上げねばもつたいない」  
わたし大人になってからもお経やお勤めは  
声を張り上げ音律たやすくあげることを心掛  
けて来た。母の遺訓がときおり今の私に届い  
ていたからだろう。

このお正信偈・和讃の稽古が約50分。そ  
れが終わると次は「お説教」の稽古である。

祖師前といつて親鸞さまの絵像がまつられ  
る前の下陣に据えられている「講座」という  
高い箱のうえに座らされる。勿論「正座」で  
ある。

そのとき母は、その高座の下に、平伏する。  
そして教えこんだ説教を子供が唱えると、母  
は、一節一節ごとに、「ありがとうございます」とつぶや  
すとか「もつたのうございます」とつぶや  
いていた。自分自身が教えを聞いて、身のう  
えに味わっていたのだ。

そのとき覚えた「お説教」

聞いても聞いてもなんともない  
なんともないのがおらじや故(わしただが)

おらがあるゆえ

親(架)ま

がある

墮(おち)しはせんぞ…

これはおそらく当時流行の「節談説教」とい  
うものがあつて、それを播州東保の福専寺と  
いう私塾で身につけていた布教使であった父  
から習つたものであつたのだろう。

当時幼いわたしは、母のそうした姿をとて  
も不思議に感じていた。しかし大人になるに  
つれ自分が説教というものに携わってから  
「これが本当なのだ」と気づいた。

念佛

・称名

にして

お經

にして

お正

信偈

にしても

声を上

げて

読みな

がら

その

声の

中に

如來の

また

祖師の

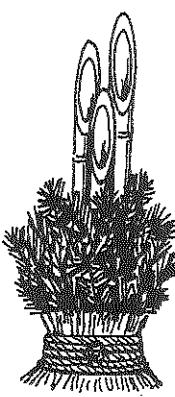
教の

声を聞かせ

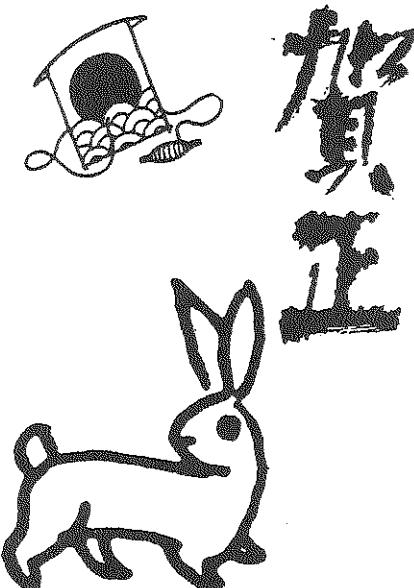
させて

から

いただくのだ。



平成二十三年元旦		勝林寺	
淨土真宗本願寺派	住職	坊守	匡紹
前住職	西池	西池	美幸
寺族	西池	哲俊	
西池	深音		
入海	西池	希里	

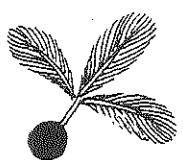


一月 陸月 のこよみ



一日 修正会(除夜会にひき続き)	四日 年始参り
六日 あすなろ(録音)	病院検診
七日 坪口報恩講	
八日 坪口報恩講	
九日 坪口報恩講	
十日 坪口報恩講	
十一日 和屋報恩講	
十二日 出石B報恩講	
十三日 出石C報恩講	
十四日 出石A報恩講	
十五日 代議員会	総代会
十六日 榆見報恩講	
十七日 榆見報恩講	
十八日 榆見報恩講	
十九日 佛壯三役会	
二十日 みのりを聞く	
二十一日 あすなろ(編集)	佛壯役員会

# 兎 う さ ぎ



シ一などといった国内から侵食退魔させられていったその風潮を揶揄したものではなかつたか。

平成二十三年(二千十一年)は「卯」のとし。十二支でいえば第4番目、「うさぎ」のとしということですが、この「うさぎ」という動物。江戸時代にはどちらかといえば縁起のよいものとし例えは絵画・彫刻・漆器のデザインに常用されていた。「兎 波にあそぶ」の図柄。また童歌(わらうた)には「兎 兎 なみてはねる 十五夜お月さん見てはねる」。箏曲「姫松小松」の曲にのせて子供らも歌っていた。

ところが明治の文明開化になると、とたんに兎の評価は地に墮ちる。

ずるくて狡猾な、そのためみずから非運をまねく。だからいつも「悪いみせしめ」として特に童謡の世界に歌われるようになつた。まず「やしきぶみやめめ」とちいう「兎と亀」。「あやまつうきめめ あひめのむせ とかいた」という結末。

次に有名な「大黒さま」と題する「出雲風土記」の神話「大国主のみこと」と「因幡の白兎」のはなし。駆をだましてよいことをしようと企んだその報いに、「駆をかねてまわる」になつた白兎を「國引き神話」が小学唱歌に歌われる。

次にこれは大正の新しい歌謡運動のなかからうまれた代表的童謡。北原白秋作詞・山田耕筰作曲の「待ちぼうけ」。兎そのものの罪ではないが中国の故事「「兎を追うものは一兎も得ず」。日本のことわざでは「蛇蜂とらず」をうたつた名曲。

明治から大正と、中国・朝鮮・満州・そして南洋諸島まで侵略の手をひろげていった日本帝国主義が、むしろ米騒動や大正デモクラ

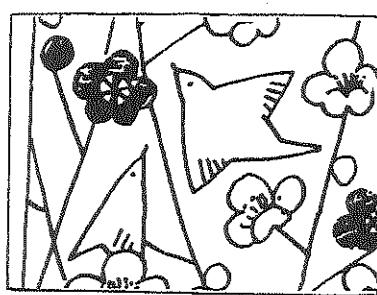
兎のうたは、今も、利発で狡猾な生きかたに警告を与えてくれるものとして、今年平成二十三年をこころして迎えたいものである。

## 成 人 式 お め で と う



横山 龜井 滝井 兼井 濱井

横山 满理 寛（出石町上村）  
井賢司（倉敷市磐津）  
奈央（出石町川原）  
結裕人（但東町栗尾）  
恵人（八鹿上小田）  
信寿（但東町小谷）  
智み（出石町上村）  
宏（出石町上村）



## い の ち に 田 覚 め る

藤田 徹文先生  
(広島 光徳寺前住)

(先生の文をお借りして私の年頭の思いを述べました)

お正月に蓮如上人の山科本願寺へお弟子の道徳と言葉方がご挨拶に来られました。上人はいきなり

「道徳は幾つになるぞ。道徳念仏申さるべ」と言われた言います。この寺報で昨年紹介したようにこの話は『蓮如上人』一代記聞き書き』の冒頭に記されています。

淨土真宗でいうお念佛とは、一体いかなるものでしょか。一般的の多くの方は、何かをお願いすることば、また祈りのことばと考えておられるのでしょう。もつと言うと呪文か「まじない」のように思っておられるのかも知れません。

しかし、淨土真宗でいうお念佛は、そのようなものではありません。親鸞さまは「南無阿弥陀仏は大行(だぎょう)である」と教えてくださいました。「大行(だぎょう)」とは、大いなる目覚めをうながす「はたらき」のことです。

私が今こうしてこの世に「いのち」があるということは、実は決して自分一人の力で生きているではありません。多くの「いのち」や「もの」との複雑なつながり関係のなかで生きさせて生きているのです。(因縁生起)。その多くとは一体どのくらいの量なのでしょうか。時間的にも空間的にも無限無量の広がりをもつた広大にして辺際のない世界のあり

とあらゆるもの、無量無邊の関係性と言つことなのです。其れらの「関係性」が「はたらき」「つながり」となつて、私のこの身この「いのち」に届いてくださつているのです。どんなときでも、私を支えてくださつている大きな「いのち」の世界が今のこの「いのち」を包んでいてくださつてゐるのです。その「大きいのち」に田覚めて、このかけがえのない「いまのいのち」を生きるのであります。

仏教は、わたしの今のこの「いのち」を生かしてくださる無量無邊の大きな「はたらき」に田覚めさせていただき、その無量寿・不可思議光のなか、この自分でしかない「いのち」を精一杯いきようと呼びかけてくださる教えです。自分で自分の「いのち」に田覚めていく営みを仏教では「行(ぎょう)」と言います。しかし、愚かな私たちにはなかなか自分で自分の「いのち」に田覚めることは出来ません。ですから、そんな私たちに、私を生かしてくださる大きな「いのち」の世界のほうから具体的に「南無阿弥陀仏」の呼び声となり、念佛となり本尊となつて私にはたらきかけてくださつてゐるのです。

「南無阿弥陀仏」の「よびこえ」は、いまのわたしの「いのち」の眞實に田覚めないで「一人相撲」と言うか、一人で力んで一人で気張つて一人でもがき苦しんでやり切れなくなつて自棄(やう)をおこし自らを傷つける無明煩惱の苦悩に墮ちてしまいがちな私を目當に「悪人正機」(そのもののためにこそ)と願い、「めざめよ」と呼び続けてくださる「本願召喚のよびこえ」のなかに気づき、目覚め、歓喜感謝、奮い立つて生きる一年でありたいと念ずることであります。

(「大乗」新年号より)